

---

# 踊る雨のリトル

熊乾ドウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

踊る雨のリトル

### 【Nコード】

N7174Y

### 【作者名】

熊乾ドウ

### 【あらすじ】

ある雨の日の、小さな幸せのじよ。

シャッターの閉まった古臭いタバコ屋の前で雨宿りをしていると、小柄な女性がタタツと駆け込んできた。

「どうも、失礼します」

「ああ…どうも。まったく、ひどい雨ですね」

「そうですね、凄い雨…どのくらいぶりだろう」

潤んだ瞳で曇天を見上げる彼女は、全身がずぶぬれだというのに笑みを浮かべていた。

明色のシャツが暗色に変わるほどの濡れ鼠だというのに、それを気にしたような様子はない。

「大丈夫ですか…？そんな状態では、すぐに風邪をひいてしまいそうですけど…」

「そう？私は平気ですよ。ていうか、なんだか楽しくなってきたよって」

おかしそうに笑みをたたえながら、彼女は水を吸ったスカートをとたなびかせてくるりと回る。もはや雨に降られ過ぎてヤケになっているのかもしれないが、当人が満足なら口出しはしにくい。とはいえ、回転と共に水しぶきが飛んでくるのには閉口したが。

嫌そうな顔をしているのに気付かれたのかは知らないが、途中で彼女はぴたりと止まり、今度はこちらを注視する。

「ところで、あなたと会うのも久しぶりですね」

「え…？どこかでお会いしましたかね」

「ええ、少し前に。あのときはお世話になりました」

降りしきる雨と同じ方向に深々と頭を下げられたものの、あいにく心当たりがない。

「すみません…失礼とは思いますが、覚えがないです」

「そうかもしれないですね。あなたはただ、通りがかっただけかもしれませんし。でも、私にとっては九死に一生を得た気分でしたから」

「はあ…」

普段はデパートで客商売をしているのだが、その際に会ったお客さんかもしれない。ここ数週ほどはセールが連続していたので、お客さんの顔も覚えてられないほどに人だかりをさばっていた。忘れても仕方ないと言えばそうだが、申し訳ないのは確かだ。

「それですけど、以前会ったのもここで会えたのも何かの縁ですから。ひとつだけ、お願いを叶えてあげますよ」

会心かつ満面の笑顔を向けられて思わず惚れてしまいそうになったが、喋る内容は警戒を要するものだった。

「お願い…?」

「ええ。何か困ってる事でもあればすぱつと解決しますし、何か欲しいものでもあれば、即刻お届けいたしますよー」

「…それはすごいね。探偵なのか宅配便なのか分からないけど、何でもできるというなら」

「すごいでしょう。実は私って、けっこうな力を持ってるんですよ」

「ふふん、と胸をそらす彼女の顔は自信に充ちあふれて見えた。」

「本当に何でもできるの？」

半ば苦笑しながら聞いてみたが、まったく彼女の威勢は変わる事が無い。

「そりゃあもつ。出世に結婚、子宝に健康、大金持ちでもハーレムでもどんとこいです。まあ生き物に被害が出るようなのは遠慮したいですけどね、天変地異とかそういうのは」

「大した自信だなあ…あ、じゃあさあ…」

「はい、なんですか？どうぞどうぞ」

思いついた冗談を、そのまま口にする。

「今降ってるこの雨を、止ませてくれないかな？」

自分なりに気の利いた冗談を話したつもりだったが、彼女は露骨に嫌そうな顔をした。

「…ああ、駄目かな。天変地異の範疇に入るから？…まあごめん、冗談でしたよ」

「…いえー、できますけどね。割と簡単に。でもね、それやっちゃうと各方面から割とヒンシユクかつちゃうんで…」

「っていうと、たとえば農家の人とかからかな」

「むしろ仲間内からですかね。…っていうより、私が止ませたくないんですよねえ。雨、大好きですし」

「うん、それは見てれば分かる」

「でしょ？どうでしょうねえ…」

一度提示してしまった以上、嘘の“引き時”を逃してしまったのだろうか。

変に悩ませてはいけないし、妥結できそうなら『お願い』に変えた方がいいかもしれない。

「ああ、それじゃあ。お金は出すから、傘を調達してきてくれないかな。それくらいなら…」

「いえ」

遮るようにびしっと両手を突き出し、

「やりますよ。雨を止めさせます。一度聞いた願いを取り下げさせるのは、恥ですから。それに…他ならない貴方の望みですからね」

さつきとは質の違う、なんだか慈悲深い微笑を浮かべてから、豪雨の中に立ち真上をぐいつと見上げた。

「それじゃあ、会えたならまたいつかお会いしましょう。お礼が言えてよかったですよ、ではでは」

返事をしようとして口を開きかけた途端、視界がピカッ！と強い光で満たされた。

直後にゴロゴロゴロツ！と雷音がつよく喉を鳴らして渦巻き、聴覚も利かなくなつた。

…しばらくして二つの感覚が戻る頃には、雨模様が夢だったかのように、空は晴れていた。

感覚の残っていた鼻からも、雨の匂いはすっかり消え失せていた。

(…本当に、雨が止んだ…白昼夢でも見ていたんだろうか)

混乱する頭を抱えてしゃがみこんだそのとき、まだしつかりと戻り切らない視界の端で、何か動いたような気がした。

目玉をその気配の方に向けると、小さな物体が動いているのを捉えられた。

素早く跳ねるように移動するそれは、狭い路地の奥の方へと消えていく。

何とはなしに、その動きを追っていく。

…するとその先には、小さな小さな生き物がいて。

三つ指をアスファルトにつくようにして、こちらを待っているようだった。

黄緑の明色が鮮やかなカエルが、濡れた身体のままに喉を鳴らしている。

たぶんこちらと目が合っただろう、路地の奥へと逃げるように飛び跳ねていった。

その方向を見ると、小さな石造りの祠があつて…奥をのぞくと、頬を膨らませた愛嬌のあるカエルの像がまつられていた。

いつぞやの晴れの日に気まぐれで、干上がりかけた路上のカエルを水場に移してやった事がある。

この小さな神様は、その恩返しに来てくれたのだろうか。

「……失敗したかな」

大きな望みを叶える機会を失ったことはともかく、大好きに違い

ない雨を止ませてしまった事を、今更ながらに悔いた。

「…まあ、しばらくは梅雨時で雨が続くはずだよ。それじゃ、また雨の日にでも」

それだけ言って帰る前に祠の奥に目を凝らすと、さっきの力エルが像の上ののっかっていた。それからこちらに別れを告げるように、小さく一度、くると喉を鳴らした。

ころころと、笑うように。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7174y/>

---

踊る雨のリトル

2011年11月21日12時29分発行